

Title	初級における「のだ文」指導の一試案
Author(s)	古川, 由理子
Citation	大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究. 3 P.67-P.78
Issue Date	2005-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/11509
DOI	10.18910/11509
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

初級における「のだ文」指導の一試案

古川 由理子

【要旨】

本稿は初級での「のだ文」のより良き指導を目指し、現行の初級教科書における「のだ文」を整理し、その改善点について提言を行なうものである。本稿では、現在の教科書に見られる<説明><理由><確認>などの様々な「のだ文」の機能を統括する性質として「前提との関連付け」に焦点を当て、これまで以上に「のだ文」を談話内に組み込むことで学習者の理解を促進できることを強調した。「のだ文」は単文または質問-応答の形で導入された場合、前提との関係が見えにくい。本稿では、初級教科書で使われている「のだ文」を前提のわかりやすさから3つのタイプに分類し、それぞれの指導方法について提案を行なった。単文での提示では「のだ文」の基本機能を理解し把握させることは困難であるが、談話における「のだ文」という視点を教師が示すことにより、「前提との関連付け」という「のだ文」の理解へと学習者を導くのではないかということを示した。

1. はじめに

「のだ文」¹⁾は、その導入に際し、多くの日本語教師が頭を悩ませる文法項目の1つであろう。学習者にとっても「のだ文」は習得が難しい項目であり、実際、「のだ」の使用においては上級学習者ですら不自然さを残す場合が多い。現在、日本語教育のほとんどの現場で、「のだ文」の導入および指導は初級時に行なわれていると考えられるが、適切な指導法が確立されているとは言い難い。

本稿は、初級日本語学習者を対象とする「のだ文」指導のより良い方法を求め、これまでの方法を検討し、新しい提言を試みるものである。

2. 初級教科書での「のだ文」の扱い

まず、現在、「のだ文」がどのように学習者に提示されているかを、多くの日本語教育機関で使用されていると考えられる代表的な初級教科書3冊で確認する。参照した教科書は以下の通りである。

- (1) スリーエーネットワーク (1998) 『みんなの日本語』初級I・II本冊
- (2) 筑波ランゲージグループ (1991-2) 『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』(以下『SFJ』) VOLUME1~3:NOTES (凡人社)
- (3) 東京外国語大学留学生日本語教育センター (1994) 『初級日本語』(同)

これらの初級教科書では、「のだ文」は疑問文と平叙文の両形式で導入されている。形式別の意味機能を大きく分けると次のようになる。

A: 疑問文形式

①-1 確認

〈1〉 郵便局へ行くんですか。

…ええ、友達に手紙を出すんです。

(『SFJ』)

〈2〉 渡辺さんは時々大阪弁を使いますね。大阪に住んでいたんですか。

…ええ、15歳まで大阪に住んでいました。

(『みんなの日本語』)

①-2²⁾ 驚き/疑い/いらだち

〈3〉 (医者) なぜですよ。

…なぜなんですか。

〈4〉 結婚するんですか。

(『SFJ』)

② 説明要求

〈5〉 どうして遅れたんですか。

…バスが来なかったんです。

(『みんなの日本語』)

〈6〉 この漢字何て読むんですか。

…宅急便。

(『SFJ』)

B: 平叙文形式

③ 理由・説明の提示

〈7〉 あしたひまですか。

…いいえ、日本語の試験なんです。

(『SFJ』)

〈8〉 運動会に参加しますか。

…いいえ、参加しません。スポーツはあまり好きじゃないんです。

(『みんなの日本語』)

④ 依頼の前置き

〈9〉 生花を習いたいんですが、いい先生を紹介していただけますか。

〈10〉 日本語で手紙を書いたんですが、ちょっと見ていただけますか。

(『みんなの日本語』)

これらの教科書では、「のだ文」はどのように教えられるべきだと想定されているのだろうか。『みんなの日本語』では、教師用指導書³⁾に「非のだ文」は特に感情を込めずに事柄を述べる場合、「のだ文」はある感情が入る場合」という記述がある。更に、「のだ文」は「驚いたり、疑問に思ったり、理由を知りたいと思った時に用いる」「理由を述べる文に使う」「何か依頼する時に、まず理由、自分の立場、状況説明を述べる時に使う」「言外の意味が含まれる」などと説明されている。『SFJ』では、「のだ」を“explanatory ending”として、“giving or requesting an explanation or reason”, “ask for confirmation”とし、その後、(1) explain for the reason for situation without indicating it explicitly, (2) expressing confirmation for one's suspicions, (3) showing surprise or irritationと説明している。

3. 初級教科書における問題点

初級学習者への文型指導における重要な点は、その文型のもつ基本性質をわかりやすく提示することと、既習の他の文型との相違を明らかにすることであると考えられる。そのような観点から、現行の初級教科書を検討してみよう。上述のとおり、『みんなの日本語』では「のだ文」には「ある感情」が入るとしているが、それが何であるかという具体的な記述はなく、非常に曖昧な説明になっている。また、『みんなの日本語』でも『SFJ』でも、「のだ文」の担う機能

として<説明><理由><確認><驚き>などが挙げられているが、「のだ文」の基本的な意味機能が何であるのか、学習者にはわかりにくい。また、なぜ<説明><理由>を表す表現が<驚き>も表すのかなど、個々の機能の有機的な結びつきが見えにくく、なぜ「のだ文」がそのような様々な機能を担うのかもはっきりしない。基本機能を提示しないまま異なった種々の機能を羅列するだけでは、学習者に混乱を与えるばかりか、理解の負担となる可能性もある。学習者が「ある感情」を<強調>というように解釈すれば、自己紹介での「わたしはリーなんです」という誤用を生む原因にもなり得るだろう。更に、このような解説では、既習の他の表現、例えば<理由>を表す表現として学習した「～からだ」などとの違いもはっきりわからない。

次に、初級教科書で扱われる「のだ文」の形式に着目すると、「のだ文」には、疑問文や疑問文に答える形が混在し、B④では「が」を後接して次の文に続く形になっている。また例文〈1〉〈2〉では「のだ文」による質問の答えに「のだ文」と「非のだ文」の両方が使われている。導入時における「のだ文」のこのような形式の相違については、従来それほど注意が払われてこなかったのではないだろうか。しかし、「のだ文」の形式は、その文の意味機能にとっても非常に重要である。例えばA②にしても、<驚き>や<いらだち>を表すには、文末の「か」を取ると不自然であるように思われる⁴⁾。このような点を無視し、「のだ」にだけ焦点を当て、「のだ文」は<驚き>や<いらだち>を表すと教えてしまっているのだろうか。

このように、「のだ文」は初級段階で適切に導入・指導されるよう、それぞれの教科書で工夫されてはいるものの、学習者にとって習得しやすい方法で提示されているとは必ずしも言えないのが現状である。

4. 先行研究

「のだ文」の教育現場における効率的な指導方法についての論考はほとんどない。庵他(2000)など学習者も対象とした文法書で項目として取り上げられ、説明が加えられているのみである。教育への応用を目指したものには、学習者の作文を用いて「のだ文」の使用条件を考察した小金丸(1990)や名嶋(2003)があるが、対象を作文や論述文に限っている。このように、学習者の産出した「のだ文」の誤用や非用から「のだ」の基本性質を明らかにしようとする研究は見られるものの、初級段階での「のだ文」指導にあたり、どのような指導が効果的であるかについて論考を加えたものは見当たらない。初級での指導が不適切なものであれば、学習者が論述文を書けるほどのレベルに達してから矯正を行なっても、有効な教育法であるとは言えないだろう。

これまでの日本語教育では、「のだ文」は、文法研究で得られた知見を基に、発話や作文など学習者の産出した結果を検証するという枠組の中で主に扱われてきた。本稿では、学習者の誤用から「のだ文」を探るのではなく、初級時における効果的な「のだ文」指導方法について模索する。そのため、ここで本稿の参考となる文法研究の成果を概観しておく。

4.1 文法研究における「のだ文」

田野村(1990)は「のだ」の基本的な機能を<背後の事情>に求める。例えば次のような文の場合、「体調が悪い」ということは、「今日は休む」ということ<背後の事情>になっているというわけである。

〈11〉 きょうは休みます。体調が悪いんです。 (田野村1990)

また〈12〉のような場合は言語化されない眼前の事実(相手の顔色が悪いということ)を受け、その〈背後の事情〉として「気分が悪い」ということを提出していると述べている。

〈12〉 (顔色の悪い人に対して)気分でも悪いんですか? (同)

田野村は「のだ」の意味特性に承前性、規定性、披瀝性、特立性の4点を挙げるが、このそれぞれを統括する基本特性として〈背後の事情〉を指摘している点が非常に有益である。

また、名嶋(2002)は「のだ」を語用論的観点から再考し、その機能を〈聞き手側から見た解釈〉とする新しい仮説を提示している。

〈13〉 庸介が亡くなりました。死んだんです。 (名嶋2002: (12))

この例では、庸介が亡くなったという発話を聞いた聞き手の反応には、「唐突過ぎて解釈不能」「冗談を言っている」などいくつか考えられるが、話し手は「のだ」の使用によって、聞き手が導き出すべきであると話し手が考える解釈、つまり庸介が死んだという解釈を優先的に行なうよう聞き手に促していると名嶋は説明している⁵⁾。関連性理論の観点を取り入れた名嶋の論考は、田野村同様、「のだ」の基本性質をつきつめ、「のだ」がもつとされてきた種々の機能を、文脈において派生されるものとして捉える点で評価できる。このような把握の仕方は、初級学習者に「のだ文」を提示する際に有効な考え方であると思われる。「のだ文」のもつ様々な機能をただ羅列するより、その基本機能をまず示す方が、学習者への負担が少なく、理解もしやすいと考えられるからである。

田野村や名嶋の論考は、初級時の「のだ文」指導においても示唆に富むものである。しかしながら、田野村の〈背後の事情〉、名嶋の〈聞き手側から見た解釈〉は、そのどちらもが学習者に初めて「のだ文」を提示する際の説明としては非常に難易度の高いものである。田野村や名嶋自身、この解釈の説明に多くの言葉を費やしているが、そのような説明を初級学習者に行なうことは現実的ではない⁶⁾。このように、文法研究から得られた知見は大きいですが、それをそのまま日本語教育に応用することはできない。しかし、現行の初級教科書が「のだ文」の異なった機能の羅列に終始しているのに対し、田野村や名嶋の統一的な「のだ文」解釈には参考に値する点が大いにある。初級時にも、まず「のだ文」の基本性質を大まかに提示し、その後、場面や文脈における各機能をそれぞれ挙げていくという方法を採用の方が、学習者にとってより有益な指導方法ではないだろうか。

4.2 談話における「のだ文」という視点

鈴木(2003)は「勧誘」の発話を例に、文型と談話や機能との関係について日本語教育の観点から論じたものである。鈴木は、日本語教育においてコミュニケーション上の機能を扱う場合、従来のような文型先行型の方法ではなく、コミュニケーションが行なわれる状況の設定をまず行なうべきだと述べている。言語の機能は発話・談話・言語行動という3つの異なったレベルに分けて考えなければ論じられないからである。本稿の考察対象は「のだ文」という文型であり、「勧誘」や「依頼」などの談話上の機能とは異なるが、鈴木(2003)の談話構造という観点は「のだ文」を考える際にも有効であると考えられる⁷⁾。もう一度〈2〉の談話を見よう。

〈2〉 渡辺さんは時々大阪弁を使いますね。大阪に住んでいたんですか。

…ええ、15歳まで大阪に住んでいました。

(『みんなの日本語』)

この例では、「大阪に住んでいたんですか」という「のだ文」の前に、「渡辺さんが大阪弁を使う」という事実が述べられ、この文が前提となって「のだ文」が発話されている。〈11〉「きょうは休みます。体調が悪いんです」などの文も、「のだ文」の前に「今日は休む」という文が先行し、その理由として「体調が悪い」ことが示されている。〈12〉の「気分でも悪いんですか？」も、(顔色の悪い人に対して)という前提つきである。このように、「のだ文」には必ず何か前提となる事柄が存在する。ある談話をいきなり「のだ文」で始めることは不自然であり、仮に「のだ文」で始まる談話があったとしても、そこには必ず視覚化された前提情報が存在する。したがって、「郵便局へ行くんですか」というような発話を行なうためには、それを推測するに足る何らかの情報が必要なのである。

このように見てくると、庵他(2000)などの先行研究が指摘する「関連付け」という性質のとおり、「のだ文」の基本性質とは、必ず何らかの前提に関連付けて発せられることではないだろうか。そうであるなら、日本語教育における「のだ文」の指導においても、「前提との関連付け」という点をより重視すべきであると考えられる。換言すれば、「のだ文」は談話中の適切な位置におかれて初めて提示可能となる文型であり、そもそも単独で教えること自体に無理があるということになる。

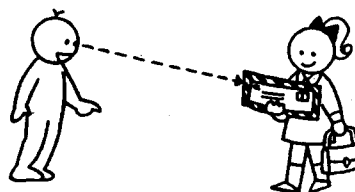
5. 初級における「のだ文」の指導方法

5.1 初級教科書の「のだ文」と前提との関わり

ここで現行の初級教科書における「のだ文」に戻ろう。前章で述べた談話構造という観点から捉えなおすと、比較的前提が補いやすいものとそうでないものがあることがわかる。

I 〈1〉郵便局へ行くんですか。

…ええ、友達に手紙を出すんです。



【SFJ】VOLUME1・NOTES.p124

〈2〉渡辺さんは時々大阪弁を使いますね。大阪に住んでいたんですか。

…ええ、15歳まで大阪に住んでいました。

〈8〉運動会に参加しますか。

…いいえ、参加しません。スポーツはあまり好きじゃないんです。

II 〈5〉どうして遅れたんですか。

…バスが来なかったんです。

〈9〉生花を習いたいんですが、いい先生を紹介していただけますか。

〈10〉日本語で手紙を書いたんですが、ちょっと見ていただけますか。

Ⅲ 〈3〉 (医者) かぜですよ。

…かぜなんですか。

〈4〉 結婚するんですか。



『SFJ』 VOLUME1・NOTES,p159

〈6〉 この漢字何て読むんですか。

…宅急便。

〈7〉 あしたひまですか。

…いいえ、日本語の試験なんです。

5.1.1 Iのタイプ

Iの3例は発話場面の復元が容易なものである。例えば〈2〉の場合は次のようになる。

[言語行動]=確認	
[談話] 前提 聞き手が時々大阪弁を使う	
[発話] A:大阪に住んでいたんですか	機能 =確認
B:ええ、15歳まで住んでいました	

言語の機能を発話・談話・言語行動の3つのレベルにおいて考察するのは鈴木(2003)に従う。さらに、本稿では「のだ文」の解釈にあたり、談話内に「前提」を付け加える。そうすると、〈2〉の例では、聞き手が「時々大阪弁を使う」ということが前提となる。前提とは、「のだ文」が使用される際の場面や状況のことであると、ここでは簡単に定義しておく。そして、その前提に基づいて「大阪に住んでいたんですか」という「のだ文」が発話され、〈確認〉の機能をもつに至ると考えられる。ここでは、この「のだ文」が確認の機能を結果的に担っているが、Bの返答も含めた談話全体も確認の言語行動を行なっていることになる。このように、〈2〉では前提が「のだ文」の直前に言語化されているため、明示的に与えられている。それに対し〈1〉では、教科書に手紙を持った人物の絵が描かれ、話し手の視線をその手紙に向けながら「のだ文」が提示されている。この場合も「郵便局へ行くのだろう」と話し手が推測するに足る前提が絵で明示されているため、前提は視覚化して与えられている。このような例は、学習者には比較的理解しやすいだろう。さらに、「手紙を持っています。郵便局へ行くのです」というように、文の順序を変えて提示することで学習者の理解を促進させることもできる。

5.1.2 IIのタイプ

「前提」は、しかし、必ずしも明示的に言語化あるいは視覚化される必要はない。例えば次の例を見てみよう。

〈15〉 A: どうして日本語を勉強するんですか。

B: 日本の大学で勉強するんです。

(『SFJ』)

この例でAは前提を明示することなく「のだ文」を発話できるが、AはBが日本語を勉強するということを発話以前に知っていなければ不自然になる。このような場合、前提は暗黙の了解として既に提示されていると考えられる。

[言語行動]=説明

[談話] **前提** (聞き手が日本語を勉強することを話し手が知っている)

[発話] A: どうして日本語を勉強するんですか **機能**=説明要求
B: 日本の大学で勉強するんです

〈5〉の例もこれにあたる。〈5〉の場合、「聞き手が遅れた」ということは話し手聞き手には周知の事実であり、それが前提となって「のだ文」が発話されている。〈5〉や〈15〉の発話を「非のだ文」にしてそれぞれ「どうして遅れましたか」「どうして日本語を勉強しますか」とすると不自然になるが、この点は学習者には理解しづらいだろう。しかし、これらはいずれも「どうして」という疑問詞疑問文における「のだ文」であり、対応する返答にも「のだ文」が使われている。返答をそれぞれ「バスが遅れました」「日本の大学で勉強します」にしてもやはり不自然であり、「のだ文」を用いる方がより自然である。このような場合、学習者には視覚化した情報あるいは前提となる文脈（例えば、〈5〉Aさんは授業に20分も遅刻してきました）を与え、「どうして～のですか」「～のです」とパターン化し、文型として導入することができるだろう。このタイプはIと同様、前提を踏まえての発話である点と、文型として導入できる点で、学習者にそれほど困難は与えないと考えられる。しかし、このような「のだ文」は状況によっては相手に対する不満や苦情の表明、理由の詰問にもなりうる。初級での導入に再考の余地ある文型とも言えよう。

〈9〉および〈10〉の例も、明示的な前提や文脈なしに「のだ文」で談話を切り出すことが不自然ではない。しかし、両例とも「～のですが」の後に後続発話を伴う複文形式である。「のだ文」を使って発話を言いさすことにより、後続発話を聞き手に推測させるというこれらの例は、会話の切り出しや依頼の前置きとして会話でよく使われ、初級教科書にも頻出する表現である。聞き手があずかり知らない話し手の個人的事情を説明し、そこで発話をいったん止めて聞き手に自分の意図することを暗示するのである。このような場合、前提となるのは発話の場の状況、すなわち話し手聞き手の関係であると考えられる。例えば〈10〉での話し手聞き手は、日本語学習者と日本人というように想定できよう。日本語が不十分である学習者が「日本語で手紙を書いた」という事実を述べることにより、聞き手は事情を理解し、依頼の前置きとしてこの発話を認知するのだと思われる⁸⁾。後続発話を省略する場合、話し手は聞き手と共有する前提を頼りに、その後の判断や解釈を聞き手に委ねるというストラテジーを使用するのであろう。

[言語行動]=説明

[談話] **前提** 話し手-日本語学習者 聞き手-日本人

[発話] 日本語で手紙を書いたんです

機能=理由説明 (⇒依頼の前置き)

このような例では、学習者に前提との関連付けを意識させることは容易でない。しかし、これらは「どうして～のですか」同様、パターン化し、文型として導入することが可能である。Iの例で示したように文の順序を変えて〈10〉ちょっと見ていただけませんか。日本語で手紙を書いたんです、として確認を図るという方法もある⁹⁾。このように、IIのタイプは前提を意識するのがやや困難ではあるが、文型として提示できるという点で、初級学習者にとってそれほど

負担にはならないと考えられる。

5.1.3 Ⅲのタイプ

以上の2タイプに対し、学習者にとってもっとも困難であると思われるのがⅢの場合である。
 〈7〉の例を考えてみよう。

[言語行動]=説明	
[談話]	[発話]A: 明日ひまですか
	前提 (明日ひまかどうかたずねられた)
	[発話]B: いいえ、日本語の試験なんです
	機能=理由・説明の提示 (⇒断り)

この例はAによる質問に対し、Bが「明日試験だ」という個人情報を実際としてのみ提示している。Aはこれを「明日暇かどうか」という質問に関連させて「Bは明日暇ではない（したがって、明日Bが暇だったら、というこれ以上の発話を継続しえない）」という理解に至るのだろう¹⁰。これはBからすると、明日の予定を話し手に説明することで間接的に「明日は暇ではない」ということを伝えることになる。Aの発言の発話意図は、おそらく勧誘や依頼、提案などを行なうための前置きであろう。そのため、Bの発話は談話内容や状況によっては、〈断り〉として機能することになるのだろう。これは、実際の発話場面で「のだ文」の〈説明〉の機能より派生する運用論上の機能とすることができる。初級教科書では、このような〈断りの理由提示〉とも言うべき「のだ文」がかなり頻繁に用いられている。直接的な断りを避けるためのストラテジーであるが、このような「のだ文」は、前提が明示的でないだけに学習者には理解が困難であろう。同様の点で、〈3〉〈4〉〈6〉も前提への関連付けが困難な例である。〈6〉の場合は〈5〉同様、疑問詞疑問文であるが、〈5〉の「どうして」という疑問詞が「のだ文」の理由提示の機能と関連させて提示しやすいのに対し、〈6〉は「のだ文」にしなければならない必然性を説明し難い。この点は〈5〉の返答が「のだ文」で提示されているのに対し、〈6〉が「のだ文」であってもなくてもよいことに表れている。

〈5〉' どうして遅れたんですか。

…バスが来なかったんです／？バスが来ませんでした

〈6〉' この漢字何て読むんですか。

…宅急便（と読むん）です／宅急便と読みます

〈6〉の場合、〈10〉同様、聞き手の方が話し手よりも必要とされる情報を多く持つという点が「のだ文」の前提になっていると考えられる（例えばAは日本語学習者でBは日本人）。これはⅡのタイプ「～のですが」の前提と同様である。疑問詞疑問文には、この他に「誰と行くんですかー田中さんとです」「いくらするんですかー千円です」などがある¹¹。しかし、このような文は会話の切り出しとしては不自然であり、談話の中に組み入れることで前提を明示することが容易になる。例えば「明日、北海道へ行って来ますー誰と行くんですかー田中さんとです」「きれいですね、これ、いくらするんですかー千円です」などである。その点、〈6〉のような例は会話の切り出しとしても使われるという点で注意が必要である。「この漢字、初めて見ました、何て読むんですか」のように、談話に組み込んだ形で提示する工夫が求められるのではないだ

ろうか。「のだ文」の談話内での機能にしても、〈5〉は説明要求であるのに対し、〈6〉は読み方を教えてほしいという依頼につながっている。

一方、〈3〉の例はより解釈が困難である。〈3〉も〈4〉も『SFJ』においてはイラストと共に導入され、〈3〉は医者言葉に、〈4〉は若い男性と年配の女性のカップルに驚く様子が描かれている。〈3〉の場合、おそらく話し手は自分の症状を風邪であるとは思っていなかったということが前提となり、「のだ文」が〈驚き〉や〈疑い〉として機能する結果となるのだろう。また、〈4〉は一般的には起こり難い事柄が前提となり、〈3〉と同じような機能を「のだ文」が担うに至るのだと考えられる。しかし、〈驚き〉や〈疑い〉は、〈説明〉や〈理由提示〉と違って話し手の感情が深く関わるものであり、これを〈説明〉などと同列の機能として扱うこと自体にも問題があると思われる。両例共に〈説明要求〉の結果が文脈や場面により〈驚き〉や〈疑い〉に派生するのではないだろうか。しかも、これらの例では、〈6〉同様、それぞれを「なぜですか」「結婚しますか」と「非のだ文」で発話したとしても、それほどの不都合は生じない。「のだ文」で発話する必然性を理解することが困難な例であろう。このような「のだ文」の導入に際しては、〈6〉のように談話に組み込むだけでなく、前提が何であるか、そしてそれが話し手の予想にいかにか反しているかの積極的な説明が教師に求められるだろう。更に言えば、このような「のだ文」は初級で必ずしも指導する必要はなく、中級以降の課題として残すのも選択肢の一つになろう。

5.1.4 タイプ別導入方法

以上をまとめ、初級における「のだ文」指導法の一例を提示すると、次のようになる。

Iのタイプ（前提の理解が容易なもの）

⇒ 前提を明示 ⇒ 文の順序を変化させ確認

IIのタイプ（疑問詞疑問文-「のだ文」での返答/依頼や許可求めの前置き）

⇒ 文型として提示 ⇒ 文の順序を変化させ確認

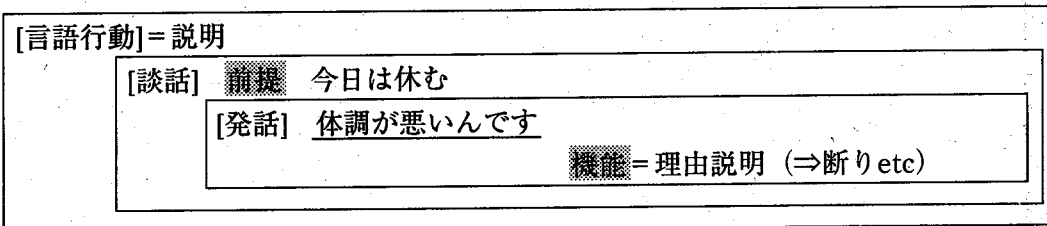
IIIのタイプ（前提との関連付けが困難なもの）

⇒ 談話に組み込んで提示・談話場面を具体的に説明

既に述べたように、IIIのタイプは初級での指導自体に再考の余地があるが、IやIIで「のだ文」の関連付けの性質をじゅうぶん押さえた上でなら、学習者に前提を推測させるという方法での定着も考えられる¹²⁾。IIIのタイプでそれが困難であれば、IのタイプやIIのタイプの「のだ文」を単文で提示し、学習者に前提や談話を考えさせるというタスクも有効であろう。

5.2 談話に「のだ文」を位置づける視点

現行の教科書には「のだ文」の機能として〈説明〉〈理由〉〈確認〉〈驚き〉〈強調〉などが挙げられている。更に、相手とのやり取りでなく、自分から発話を切り出す〈11〉のような場合は、発せられる場面や状況により、〈許可求め〉や〈断り〉として機能することもできる。



このように考えると、「のだ文」のもつ基本機能は<前提に関連付けての説明>に還元できるのではないかと考えられる¹³⁾。「のだ文」が疑問文形式で用いられれば場面に応じて<確認>や<説明要求>になり、平叙文であれば<理由説明>や<断り>へと派生するのではないだろうか。しかしながら、「のだ文」の基本機能の同定には多くの検証が必要であり、本稿はその立場にない。本稿が扱えるのは初級でいかに「のだ文」を指導すべきかである。その点で確実なのは、種々の機能をもつ「のだ文」に統一的な基本機能を提示することは、学習者の理解を促進するだけでなく、負担の軽減ともなるだろうということである。「のだ文」を談話構造の中に位置づけ、「のだ文」が前提とする事柄を考えることにより、これまで示された種々の機能が、文脈によって派生するものだというを有効に示せるのではないだろうか。よく指摘される「のだ文」の強調の響きも、既に提示されている事柄を前提として捉え、話し手がそれに基づいて発話することから出てくるとも考えられる¹⁴⁾。

談話における「のだ文」という視点は、「のだ文」と「非のだ文」との相違を把握する一助にもなる。初級学習者には「どうして」を使った疑問文に「～んですから」で答える誤用がよく見られる。これは、「から」は理由を表す、または「どうして」で聞かれたら「～から」で答える、という既習事項に学習者が「のだ文」を付加してしまうことによると思われる。「のだ文」が必要とする前提と、「から」や「ので」の表す理由との関係は慎重に検討しなければならないが、前提との関連付けということに焦点を当てることにより、「のだ文」の性質をある程度示せるのではないだろうか。例えば、〈15〉の「どうして日本語を勉強するんですか」では、あらかじめBが日本語を学習しているような絵を提示し、前提を明示することによって、「日本の大学で勉強するんです」という「のだ文」示す。ここで発揮される「のだ文」の機能は「説明要求」「説明」ということになるだろう。このように、「のだ文」を談話に位置づけることで、これまで「のだ文」が担うとされた各機能が、「のだ文」が具体的な場面に置かれることによって結果的に発揮しうる機能であるということ、学習者に具体的に説明できるのではないだろうか。

6. おわりに

本稿では、「のだ文」の特徴を必ず何らかの前提と関連付けて発話されるということに求め、初級文型としての「のだ文」指導方法を模索した。そして、それには「のだ文」を談話に位置づける視点が有効ではないかという提案を行なった。しかし、このことは、初級で「のだ文」を指導するのが妥当であるのか、あるいは現在のように文型として導入するだけでよいのか¹⁵⁾という大きな問いをはらんでいるように思われる。また、「のだ文」には疑問文や疑問文の答えでないものが発話される場合（例えば「この水は飲めるんです」）もよくある。このような「のだ文」を、初級で扱うべきかという問題も残る¹⁶⁾。

今後は、本稿で提案した「のだ文」の指導方法が適切であるか、さらなる検討が必要であろう。まず、本稿の方法を用いて指導を行なった場合の学習者の「のだ文」習得状況を検証しな

ければならない。現行の方法と比べ、「のだ文」の誤用や非用が改善されるかどうか、その一つの目安となろう。また、「のだ文」は会話だけでなく、作文や論説文などの結論部分にも頻繁に用いられる。現行の初級教科書は、運用能力の養成に重点を置く傾向が強いため、話し言葉中心の文型積み上げ形式となっている。本稿で主張した「のだ文」の指導方法が、中級や上級の指導においても有効であるかどうかを検証するためにも、書き言葉における「のだ文」の検討も必要であろう。

- 1) 文末形式が「のだ」「のである」「のです」「んだ」「んです」などで終わる文の総称。
- 2) ①-1と2は線引きが難しく、状況によって判断するか、どちらとも取れる場合も多いと考えられる。
- 3) 『みんなの日本語初級Ⅱ 教え方の手引き』スリーエーネットワーク (2001)。
- 4) 「かぜんんだ」「結婚するんだ」と普通体で表現する場合は独り言的になり、自分自身を納得させるような響きを感じられる。
- 5) 名嶋は「のだ」の機能について、「提示する解釈の『範列的關係における優位性』を伝達することで発話の関連性を明示的に保証し、聞き手の発話解釈をある特定の方向へ導く」(p86)と述べている。
- 6) 名嶋の<聞き手側から見た解釈>は、どちらかと言えばもって回った言い方である。そもそも発話とは、話し手が行なうものである。もし話し手がある事柄について優先的な解釈を聞き手に望むなら、<念押し>や<強調>といった積極的な方策を採らずに、なぜわざわざ聞き手側から見た解釈として提示しなければならないのだろうか。
- 7) 「のだ文」解釈に連文論の観点が必要であることは、小矢野(1981)が既に指摘している。
- 8) 話し手は「のだ文」で依頼を行なっているわけではない。ここで述べられているのはあくまで事実であり、節全体で考えると依頼の理由や状況説明といったものである。
- 9) 尚、複文形式において理由を表す「ので」の導入は『みんなの日本語』『SFJ』で「のだ文」導入後、『初級日本語』で「のだ文」導入前に配置されている。『初級日本語』のように、単文から複文という順序にこだわらず、複文形式の「ので」導入後に「のだ文」を提示するという考え方もある。
- 10) この場合、Bの返答は「いいえ、ひまではありません。日本語の試験なんです」の省略と捉えることもできる。そうすれば、「明日暇ではない」ということが「のだ文」の前提となり、Iのタイプとなるのだが、このような返答は冗長でむしろ不自然である。したがって、自然会話としての<7>のような「のだ文」は、学習者には理解が難しいと推測できる。
- 11) 「どこへ行くんですか-北海道です」などは『しんにほんごのきそ』の導入用絵カードにあるように、旅行かばんを持った人物への発話として視覚的に前提を提示することができる。
- 12) 大阪外国語大学留学生日本語教育センター助教授平尾得子氏のご教唆による。
- 13) これは、「の」の名詞句化機能とも合致すると思われる。小矢野(1981)は「のだ文」の「の」について、「『の』は、それによって統括されている事柄が客観的な事柄としてとらえられていることを意味論的に示す働きを担っている」と述べている。これは、「のだ文」が前提を踏まえた発言であるためとも解釈できる。そもそも「の」の機能は事柄を名詞化することに求められる。そのように考えると、「のだ文」の「の」も、ある情報を「の」を用いて名詞化することにより、話し手にとって扱い可能なモノに変化させていると考えられないだろうか。「のだ文」のテンスを変える場合、「昨日は忙しかったのです」のように「のだった」という形ではなく、「のだ」が受ける事柄自体をタ形表示するのも、「のだ」が前提とする事柄を発話時に扱うからではないかと思われる。尚、寺村(1984)は「のだ」をムードの助動詞として位置づけ、「説明」のム

ードを表すとしている。

- 14) マクグロイン (1984) は談話における「のです」の機能について「話し手、聞き手の一方にしか属さない情報を、あたかも共有の情報 (shared information) であるかのように提示する」と述べている。また神尾 (1990) には分裂文の前提に関し「話し手の意見、見方、反応などは、常に聞き手にとって会話中の関心事になっている」という記述がある。
- 15) 初級で扱われる「のだ文」はすべて会話で用いられるものであり、この点で他の文型と異なっていると考えられる。また、書き言葉における「のだ文」は日本語教科書では中級以降体系的に扱われていない。
- 16) 更に言えば、これには感情形容詞の人称制限において、第三者が感情主である場合、「のだ文」にすると許容される (例えば「花子は嬉しいのだ」) ことも含まれる。この場合、話し手聞き手が共に、花子に普段と違う様子を感ずるなどし、それを前提として話し手が花子の感情を推測したり、説明したりするために「のだ文」が使われていると考えられる。このような「のだ文」の導入時期についても検討が必要であろう。

<参考文献>

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000) 松岡弘監修

『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク。

大曾美恵子 (1986) 「誤用分析 2 『先生アイスクリームが食べたいんですか。』」『日本語学』10月号, pp124-127.

内田安伊子 (2003) 「『そうです』という答えについて」『日本語教育』119号, pp41-50.

神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析—』大修館書店。

国広哲弥 (1985) 「『のだ』の意義素覚え書」『東京大学言語学論集'84』東京大学言語学研究室, pp5-9.

小矢野哲夫 (1981) 「『のだ』をめぐる諸問題」『島田勇雄先生古希記念ことばの論文集』明治書院, pp215-232.

小金丸春美 (1990) 「作文における『のだ』の誤用例分析」『日本語教育』71号, pp182-196.

重見一行 (1994) 「『連体なり』文と係結び文と『のだ』文—係結び文から『のだ』文へ—」

『高知大学教育学部研究報告』第2部 第49号 高知大学教育学部, pp1-13.

鈴木睦 (1989) 「聞き手の私的領域と丁寧表現—日本語の丁寧さは如何にして成り立つか—」

『日本語学』2月号, pp58-67.

鈴木睦 (2003) 「コミュニケーションからみた勧誘のしくみ—日本語教育の視点から—」

『社会言語科学』第6巻 第1号

田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I』和泉書院。

寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版。

名嶋義直 (2002) 「『説明のノダ』再考—因果関係を中心に—」『日本語文法』2巻1号, pp66-88.

名嶋義直 (2003) 「いわゆる『論述文』におけるノダの使用条件—学習者の作文を中心に—」

『日本語教育』118号, pp37-46.

野田春美 (1997) 『の(だ)の機能』くろしお出版。

マクグロイン・H・直美 (1984) 「談話・文章における『のです』の機能」『月刊言語』4月号, pp254-260.

村松直子 (1995) 「中国語母語話者の誤用例から見た日本語『のだ』の表現」『名城大学人文紀要』第49集

名城大学人文研究会, pp27-40.

(ふるかわ ゆりこ 本センター非常勤講師)